

桑 名 郡 多 度 町

南小山廃寺発掘調査報告

1 9 8 6

多 度 町 教 育 委 員 会

序

多度町は三重県の北端にあり、古くから多度神社の門前町として栄えてきたところでもあります。神社所蔵の多数の鏡、資財帳をはじめ、柚井泥炭層遺跡、天王平遺跡、愛宕中世墓群等、県下でも著名な文化遺産がのこされています。また、多度神社が平家の氏神であったという説が出されたことも記憶に新しいところでもあります。

南小山廃寺も、鷗尾の出土により昭和初期から注目されていました。今回の調査の結果、ほぼ寺の東端が判明し、瓦敷の遺構等寺との強い関連のある施設を検出することができました。近年当町は先端産業を誘致し、大きく変貌を遂げつつありますが、開発との調和を図り、古来残されてきた文化遺産を守ること大切なことでもあります。

この度の発掘調査にあたり、ご協力いただいた関係機関各位、終始熱心に調査に従事された地元の方々及び各先生方に謝意を表するとともに、今後とも文化財保護に対する御指導、御協力をお願いいたします。

多度町教育委員会

教 育 長 水 谷 武

例 言

1. 本書は、町道多度～御衣野線改良工事に伴う南小山廃寺発掘調査の調査報告書である。
2. 調査体制は下記のとおりである。なお敬称は略し、() 内は調査時の所属である。

調査主体 多度町教育委員会

調査担当 伊東春夫（三重県文化財調査員）

調査協力 三重県教育委員会文化課
福田典明（四日市市立西笹川
中学校教諭）
清水弘之（菰野町立菰野中
学校講師）
多度町史研究会（代表 磯貝
豊）

事務局 伊藤清隆（多度町教育委員会）

3. 本遺跡の遺跡標示略記号は6 BMOとし、方位は磁北を用いた。
4. 遺構標示は下記による。
SB：建物跡 SD：溝 SX：その他の遺構
5. 本書の執筆は伊東が担当した。

目 次

I	前 言	1
II	位置と周辺の遺跡	3
III	遺 構	5
IV	遺 物	6
V	まとめにかえて	12

図 版

- 第1図 遺跡位置図
- 第2図 遺跡地形図
- 第3図 B地区遺構平面図
- 第4図 A地区遺構平面図
- 第5図 掘立柱建物平面図
- 第6図 S X 3 平面図
- 第7図 瓦拓影図
- 第8図 瓦・埴拓影図、土器実測図

I 前 言

初めに南小山^{みなみおやま}廃寺遺跡名について触れておく。大字・小字・通称などで、南小山という地名は存在しない。しかしなぜこの名称が使われているかという、この遺跡が確認される前に、北小山廃寺が確認されていたからである。この北小山という名称も大字・小字名にないが、この周辺の集落の通称として用いられている。そこでこの南方に当たることから、このように呼ぶようになったもので、おそらく在地の方々の命名ならば、遺跡の傍らの小山神社氏子の集落名である東小山の地名を付けられたであろう。

さて当廃寺の存在は、地元の果樹園経営者の方々には開墾当初より周知の事実であったであろう。しかし一般的にその存在が知られるようになったのは、昭和9・10年冬の開墾が契機となった。この時、その開墾地で古瓦が出土していることに最初に注目されたのは、町内大字^{みぞの}御衣野にお住まいの故草薙伝四郎・草薙宇八（現桑名市在住）両氏であった。

このころの動向を町内大字香取住の故伊東富太郎の日記でたどってみよう。9年2月2日「夜校長〔草薙宇八氏で当時の七取（現多度北）小学校長であった〕古瓦を持って来られる。小山にて出たものの由にて一寸面白きものあり」これが南小山廃寺の初の記事である。3月27日「午後……校長は小山廃寺の礎石の所在判明せる事を告げて帰られる」4月21日「午後3時頃校長来られ、共に御衣野へ行き蒐集の瓦を見て後、小山廃寺礎石を水車場にて一見の上、小山へ行き寺跡を探る。幸に跡地にて耕作中の（岡田）金四郎氏（故人・小山住）に種々話を聞く。大礎石あったらしく7時頃帰る」そして翌10年2月6日「留守中、伝四郎君、小山に古瓦出土の件をしらせてくれる」同11日「午前中、（渡部）敏雄君（香取住）、小山の古瓦出土地へ行き二・三点出土品貰って来る。午後一度出掛ける事に。校長も誘う。三時頃校長・高瀬初一（現桑名市在住、当時の七取小学校勤務）先生と家族と小山行き。夕方迄」同27日「午後御衣野の伝四郎さん、小山鬼様の破片と唐草とを持参被下」この鬼様の破片こそ^{しび}鷗尾であった。

かくて両草薙氏の収集品の他、拾い集められる限りの軒瓦と鷗尾との模様のあるものを集めた。先の水車場にあった礎石は、各辺45cm程の三角形で、平滑面のほぼ中心に径16～18cm深さ2.8cmの浅い穴が穿たれている厚さ約18cmの砂岩である（この礎石は後年、遺物保存のためにと、香取の伊東家に寄託された）また大礎石とは畳2畳敷程で、大バケツ1～2杯ほどの水が入るくらいの穴があったといい、大正の頃十数個に割り某寺の鐘堂の土台に使われたという。更にこの他、廃寺近辺にある長径98cm、短径65cmの長楕円形で、厚さ20cm程の砂岩も、礎石の一つと伝えられている。

その後昭和11年4月、当時の東京帝室博物館で「奈良時代出土品展覧会」の開催に当たり、鷗尾を出品するようにという依頼があり出品した。また同43年4月奈良

国立博物館での「飛鳥・白鳳・古瓦展」に、当廃寺及び北小山廃寺出土の瓦当を出品した。同 45 年 11 月、文化庁文化財保護部長名で、重要遺跡の緊急指定の調査のため当廃寺の関係資料の調査提出を名ぜられ、報告した。

次に北小山廃寺について触れておく。とは言いながら、寺跡としての根拠もないが、当遺跡が確認された大正末年頃からの呼び名に従っておく。またその別称として、馬場上廃寺とも呼ばれているが、これは当遺跡の南東方の丘陵下に、多度神社の例大祭に馬を駆けさせる馬場があることに因っている。ところで当遺跡は南小山廃寺よりすれば北北東約 1200 m（近鉄多度駅東）にあり、今でも古瓦片等が散布しているが、現在までに収集した瓦当は、重圈文縁単弁十葉蓮花文^{あぶみ}瓦破片 2 個と四重弧文字^{のき}瓦片 1 個とであって、これについては後述する。

更に、この南北両小山廃寺とも寺院名についての伝承はない。しかしこの小山に関わって、名古屋市大須の、真福寺本『尾張国郡司・百姓等解文』の奥書に「於勢州桑名郡内富津厨小山勝福寺（中略）正中式年八月十一彼岸第三午^{くら}了」とあるがこの富津は今の多度町戸津のこと、小山は文字通り小山のことと了解されている。かくして正中 2（1325）年当時、当町小山に勝福寺という寺院が存在していたが、この勝福寺が南北どちらの廃寺だったかという問題がある。ただ単純に考えてみると、南小山廃寺の場合これまでに出土している瓦当のうち、最も新しいもので平安前期（北小山廃寺出土瓦は奈良後期）と考えられ、その頃の新築とした場合でもはたして正中 2 年まで存続しえたかどうか、甚だ疑問に思われる。

さて昭和 50 年代の後半になって、町内の御衣野～小山間に町道を建設する案が具体化され、これが線引きの過程で南小山廃寺を通過することとなったが、町当局も当廃寺主要部を避け、寺跡の東から南にかけて分布する西谷通遺跡との間を抜ける案を立てられたので、県教委文化課の指示を仰ぎ、試掘調査が行われることとなった。かくして同 56 年 8 月当時、県道四日市多度線改良工事に伴い天王平^{てんのうびら}遺跡を調査中であった県教委文化課職員の方々に、ご指導、ご協力をいただき試掘調査を実施した。試掘坑は 8 箇所、うち 6 箇所は 2 m×4 m、他の 2 箇所は 4 m×4 m である。その結果は、今回の調査で A 地区に相当する 2 箇所と、竹藪のなかと、最北端の崖の直上部との各 1 箇所では、出土遺物が殆どなかった。そこで崖の上は今回の調査から除外した。また B 地区西半の高所に当たる部分の 2 箇所と、同地区北東部の高所の 1 箇所とにおいては、瓦や須恵器、灰釉陶器などが出土した。そして B 地区南東部の低地の 4 m×4 m の試掘坑では、中世の灰釉陶器などとともに、瓦製装飾品 1 点が地山に達するまでに出土した。そしてその地山面、即ち地表下 1 m 程の深さから、幅 1 m 程に瓦の破片が北から南に敷き並べられた状態で検出された。又その西には焼土があり更に西へ続く様子であった。

往復 2 車線の町道建設に当たり、当遺跡部分は切通しとなるため、最大幅は東西約 30m、総延長は南北約 120m が、調査対象となった。しかし前記したように、試掘

調査の結果から、北端の崖上は調査からはずした。竹藪部分については、十字トレ
ンチを入れたうえ、結果としてはここも調査から除外した。調査は7月1日より10
月末まで、雨天日と盆休みを除くほぼ連日続けられ、その後11月以降は遺物整理及
び資料の整理に費やされた。以上が今回の試掘調査と今回の調査との関連である。

最後に、この紙上をお借りして、伊東春夫が過去に誤りの報告をしたことがある
ので、以下の3点について訂正し、お詫びを申し上げる。その誤りは、昭和43年
4月奈良国立博物館「飛鳥・白鳳・古瓦展」の時と、同45年11月文化庁遺跡調査
の報告の時との二回である。

①南小山廃寺の鎧瓦出土形式数を、完全に報告しなかった点、

②奈良博報告書『飛鳥白鳳の古瓦』図版番号131は、馬場上（北小山）廃寺のもの
ではなく、南小山出土であり、北小山からは全く別のもの（一覧表の11）が出土
している点、

③両廃寺の瓦には同範のものはない点である。

この項を終わるに当たり一言御挨拶を。1985年7月1日の調査を開始するに先
立つ時点から、終始ご懇篤な指導と、休日を利用しての実測や製図など実地作業
と、今年この報告書完成まで多大の協力を惜しまれなかった、県教育委員会文化課
の方々、また菰野中学校の清水、西笹川中学校の福田両先生には、酷暑といわれた
昨年の真夏を、遠方より連日往復していただき、特に清水先生には、二学期に入っ
てからも休講日や休日まで出ていただき、結果的には発掘作業の終了までご尽力下
さいましたことは、感謝の言葉ありません。有難うございました。

さらに八賀三重大学教授、並びに小玉文化課主幹の両先生には、今年3月10日
遠路遺物の調査指導にお越し頂くなど、種々な御指導を賜りました。深く謝意を申
し述べる次第です。

そしてまた7月より11月中旬までの長きにわたり、酷暑や雨風の中もいとわず発
掘作業に従事してくださった小林小山区長を始めとする20数名の方々、或は発掘
現場から町資料館に運び込まれた出土遺物の整理に当たって下さった磯貝多度町史
研究会長を始め会員の方々へも、それぞれ厚く御礼申し上げます。

なお最後に町長、教育委員会、建設課の方々には、予定期間をはるかに越えたに
も関わらずよく我慢をして御後援をして下さったと感謝しておりました。ここに記
して御礼に替えさせていただきます。

Ⅱ 位置と周辺の遺跡

[1] 多度町内

多度町は三重県の北端、揖斐川^{いび}の右岸にあり、岐阜県海津郡南濃町に接する。当
遺跡が立地する大字小山は、町内を南流する多度・肱江^{ひじえ}両川に挟まれ、その大部分
が丘陵地（最高地点は標高110m強）で南東部に少しの沖積平野がある。

南小山廃寺(1)は大字小山字中ノ谷にあり、標高33m～17m、東西約200m・南北約80m程の範囲である。遺跡として認識している範囲は、南大門が在ったと思われる南部山麓部の雑木林と、中門を含む主要部と、僧房等の存在を推定している北部高地の一帯で、このうち北西部の一面が松林となっているが、これも含めて果樹園として開墾されていたという。

この寺跡の山裾の南東を取り巻くように西谷通遺跡(2)があり、この両遺跡の北東方の谷川を隔てた所に、中世の小山城跡(3)がある。これらから北北東の丘陵部の東斜面(標高50～10m)が天王平遺跡(4)で、これは縄文～室町時代の複合遺跡、その東端中央のやや北寄りに北小山廃寺(5)も存在する。さらに当廃寺のすぐ西で丘陵地南斜面の中央部の、大久保集落の周辺に、16基の古墳群(6)がある。以上が小山の主な遺跡である。

他の町内の主な遺跡としては、大字^{ゆい}柚井に縄文～古墳時代の一ノ谷A・B遺跡(7・8)、一ノ谷古墳群(9)、平安期中心の柚井泥炭層遺跡(10)、中世の愛宕墓址(11)などである。大字多度では多度神宮寺跡(12)、多度経塚(13)などが挙げられよう。

これらの内で、古瓦を出土している所は、先ず多度神宮寺跡が挙げられ、平安末～室町期の巴文鐙瓦(4種)、唐草文字瓦(3種?)、鬼瓦破片がある。次に柚井泥炭層遺跡からも、平瓦が数片出ていて、これらは言うまでもなく表面に布目と裏面に叩き目があり、これは鈴木敏雄著『三重県古瓦図録』に登録された。恐らく平安未までのものかと思うが、瓦当が出ていないので的確なことは言えない。

[2] 桑名市

ここで視野を少し広げて桑名市内の寺院跡を見ると、西方廃寺、額田廃寺、七和廃寺などであるが、このうち前の2廃寺は白鳳～奈良時代、後は平安時代と言われている。他に西方瓦窯跡がある。ここにそれぞれの概要と、出土瓦について名称を記しておく。

(額田廃寺) この遺跡は早くから瓦積み基壇が確認されていたが、昭和39年に発掘調査が行われ、法隆寺式伽藍配置であることが判明し、前記の瓦積み基壇は講堂跡と確認された。当遺跡からは、鐙瓦二形式と、小金銅仏一体、埴仏二体のほかに、土器類などが出土しており、同市額田の故吉川重武氏(現伊藤春彦氏)柴田寅王氏が所蔵されている。なお、調査による出土品は桑名市博物館に保管されている。

鐙瓦 重圈文縁 単弁八葉蓮花文鐙瓦(奈良国博『飛鳥白鳳の古瓦』図版125)

面違鋸歯文縁 複弁八葉蓮花文鐙瓦(同上図版211)

(西方廃寺) これまでの瓦片等の散布面積の広さなどよりすれば、寺院跡と考えることは許されそうに思う。即ち前記の額田廃寺はやや勾配のある丘陵上に中門までがあり、その崖下に南大門があったはずなのに対し、当廃寺も丘陵上にあるが、北西に高く南東が低い極めて緩い勾配であり、而も広く開けた地形である。

当遺跡からの出土品は、鑑瓦と宇瓦の他に丸瓦と平瓦である。鑑瓦は五形式、宇瓦は三形式がある。なおこれらの収蔵者は同市西方の水谷次郎氏、及び阿部正好氏である。

鑑瓦 素文縁 単弁八葉蓮花文鑑瓦
 素文縁 珠文帯 複弁八葉蓮花文鑑瓦
 重圈文縁 飛雲文帯 素弁十三葉蓮花文鑑瓦（鈴木敏雄著『三重県古瓦
 図録』瓦図第一版一 1）
 素文縁 十一葉蓮花文鑑瓦
 素文縁 十一葉蓮花文鑑瓦（同上第一版 2）
宇瓦 珠文帯 唐草文字瓦
 扁行飛雲文字瓦
 均正文字瓦（文様不明）（同上第二版 1）

（七和廃寺）南向きの緩斜面に、多数の布目瓦が落ちていたといわれる。これだけで寺跡と名付けられているが、未調査の現段階では寺跡か或は他の建造物跡なのか明確ではないが、一応従来の呼称に従う。

（西方古窯跡）発見後 2 ～ 3 週間して、埋め戻す措置を採る指示が県教委文化課から出される寸前、窯体の中に焼成するために詰め込まれたままの状態であったものが忽然と抜き取られていた。取り返しの付かない誠に残念なことであった。当窯跡からの出土品は、ほぼ完形の緑釉長頸瓶一個が、この遺跡発見者でもある同市東南町の二之湯昭二氏によって収集された。他には窯体が壊滅した後で付近に落ちていた瓦の破片数点が、水谷次郎氏・桑名高校郷土研究部などによって捜し集められたに過ぎない。

以上が桑名市に於ける状況であるが、次いで近いところは、三重郡朝日町の金光寺遺跡であろう。ここからは、重弁八葉蓮花文鑑瓦が出土している。

Ⅲ 遺 構

A 区の遺構

遺跡の立地する丘陵東南端に調査区を設定したが、わずかに数個のピットと細い溝が検出されたにとどまる。

B 区の遺構

小山神社の真後ろにあたり、地形的に上・中・下段にわかれ、以下の遺構が検出された。

S B 1 遺跡の北端で検出された 1 辺 80cm 余りの方形に近い堀形をもつ、5 間×2 間の東西棟である。柱間距離は棟方向で 2.30m、梁方向で 2.10m である。建物の方向は N 72° W である。堀形から灰釉陶器の細片を出土している。

S D 2 S B 1 の梁方向と併走する溝で南北に 50m 余りにわたり掘られ、調査区

の上段と中・下段を区切る。幅 1.2 m 前後、深さ 20 ～ 30cm で、北から 20 m 過ぎで 2 条に分かれ南走する。

S X 3 調査区下段で検出された瓦敷の遺構である。これも S B 1 と併走し、南北に 23 m 続き、調査区外へ延びる。幅 1.6 m 前後に瓦がおかれており、両端はところどころ、半切の平瓦を並べたようになっており、通路として利用されたのではないかと考えられる。南端については未検出であり、工事着工時に確認する予定である。

S D 4 下層から検出された溝で、古墳時代の須恵器を出土しており、古墳痕跡であろう。

今回の調査では検出された遺構密度はうすいが、S B 1・S D 2・S X 3 とともに方向を同じにしており、寺に付属する施設として整備されたものであろう。

IV 遺 物

[1] 瓦、及び瓦製品

初めに瓦等の呼称について、次の通り御了解願いたい。軒丸瓦・軒平瓦は、それぞれ鐙瓦・宇瓦と、また昭和 9・10 年を中心に伊東富太郎が収集した出土品は、伊東旧蔵品と記していく。

当廃寺で出土している屋根瓦としては、鐙瓦が七形式と三垂形式、宇瓦は一形式と一垂形式、鴟尾一種と、平瓦、丸瓦（本瓦葺用と行基葺用の二形式）を確認している。この内で鐙瓦・宇瓦の計数については、後に北小山廃寺のものを含めて一覧表にしたので参照されたい。ここでは、各形式ごとに、一覧表には現れてこない特徴を挙げる。また塼二種のうち一種を三分類し、瓦製装飾品一類と共に記述する。

1 鐙瓦

(1) 重圈文縁 素弁十葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形反転形式。

出土個体数は二個。低い凸型の中房上の蓮子は九個で三列、三段に整然と並んでいる。また断面図・拓本でも解るように全てに鋭さがみられ、特に円形の花卉端が反転する様子に鋭さが感じられる。なお周縁上は一重の圈がその中央を巡っている

(2) 素弁十葉蓮花文鐙瓦。前掲 (1) の型崩れである。

(1) に比し、間延びして鈍重な感じである。出土個体数は最も多く、中には厚さ 47mm を計るもの、灰白色を呈するものもあるが、花卉端の反転する様子は摩滅の甚だしい瓦にも鋭さが漂っている。当遺跡出土鐙瓦中、最も大型のものである。

(3) 重圈文縁 単弁八葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形反転形式。 周縁から中房に向かって深く掘込まれ、しかも全体的に彫りが深く、重厚な感じである。高い凸型で而も比較的小さい中房、八葉にしては細く、その先端を断ち切られたような花卉で、単弁とは言いながら、子葉は細く弁央の稜線と見紛うほど、個体によっては子葉が認められないものもある。このような花卉の間に、太く盛り上がった間弁がある。

(4) 重圈文縁 細弁単弁十二葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形形式。『飛鳥白鳳の古瓦』では「素文縁」とし、説明文に「周縁は細い外傾縁」とされているが、実物には周縁が立ち上がったところで、一条の圈線が認められるので、重圈文縁とした。この出土は三個体（伊東旧蔵品・岡田氏収集品・新集品各一個）で、共に周縁部は荒れがひどい。だが子葉の部分は比較的損傷が浅く、その長さ・幅は約 26mm・7mm を計る。

(5) 細弁単弁十二葉蓮花文鐙瓦。前出 (4) の型崩れである。その違いは、子葉の最も幅の広い部分で、先の方が押し潰され、消えて花卉に同化してしまった感じである。また中房や一部の間弁の形も崩れている。

以上が、奈良前期までに作られたものであろう。そして (6) (7) (8) は奈良後期、(9) (10) は平安前期まで下がるものと思われる。

(6) 素文縁 重弁八葉蓮花文鐙瓦 花卉端尖形形式。

中房は小さく、薄く二段に積まれた上に、八万－伸びる放射状の先端の間に、小型の珠文が置かれている。今回出土の破片 5 個があるが個体数は不明である。

(7) 重弁八葉蓮花文鐙瓦。(6) の型崩れである。

伊東旧蔵品の一点のみ。(6) との相違点の一つは花卉が太り、しかも複雑になっていることである。

(8) 単弁十葉蓮花文鐙瓦

出土は 50 年前と今回と各一個体ずつ、しかも中房と周囲の径 10cm ほどの小片であって、全体像は解らない。中房は低く花卉も膨らみはなく、子葉・間弁の線も弱く平坦である。もっとも胎土の粗さと焼成の甘さによるものか、或は火災による膚荒れの為なのかも知れない。

(9) 重圈文縁 素弁十葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形形式。

胎土・焼成が悪く脆く完形品はない。間弁は退化して三角形となり、中房の蓮子を確認するにも困ったほどであった。制作年代は平安初期まで降るのであろう。

(10) 重圈文縁 素弁九葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形形式。

前記の (9) が退化した瓦というべきもので、中房は台形をなさず、花卉の元は鋭く尖り、その空間に四蓮子を置いただけである。また間弁はほぼ正三角形をなす。胎土は粗く焼成は脆弱で、出土点数は多いにもかかわらず、完形品は皆無であった。

2 宇瓦

(12) 型押（押印とも言う）三重弧文字瓦 別称は簾状文 段顎形式。

三重弧文を基礎として、型押しによる成形である。この成形には、瓦当の面を一杯に覆う押型を作成し、型押ししたとは考え難く、上の長方形（内法 8mm × 30mm、但し下部はやや広い。以下同）と、間の横棧（上下の長方形の内法計測点の間の幅 13mm）と、下の長方形（7mm × 31mm）と、両側の縦棧とを、一セットとするスタンプ（押型）で、型押ししたものと思われる。但し、隣接するスタンプとの間隔、及

び瓦のカーブによって、縦棧の幅と配置を考慮する必要がある為、両側の縦棧を作り付けなかった模様である。いわゆる下駄の歯状のものによる型押しと考えられる一セットがスタンプされている中に、普通寸法より横に長いものがあり、その底面と立ち上がりに押し誤り跡が残ることは、このスタンプが一個ずつ押されたことの証左である。また、宇瓦頭部の幅 285mm から推量して、この瓦当面にはスタンプが六回押されたと思われる。なおこの瓦当面の両端は三角型である。

3 平瓦・丸瓦

(1) 平瓦 完全な瓦は出土していないが、狭い頭部での幅は 285mm、深さ 39mm、厚さ 22mm、これから長さ 150mm のところで、幅 311mm、深さ 49mm、厚さ 32mm である。これがほぼ標準であろうが、一つの破片では厚さ 45mm を計るものがある。

(2) 本瓦葺丸 完形のものが無いので、径、高さは不明、一破片での長さ 318mm、玉縁の長さ 75mm、厚さ 22mm である。

(3) 行基葺丸瓦 出土品中に完形品が無いので、厚さ 20mm である他、計数は全く不明である。

4 鰐尾

現在、接合可能な 8 個の破片は、胴部から尾部の一部（現存 510mm × 380mm）であつて、^{ひれ}鰭の厚さ 37mm、縦帯各一条の幅約 38mm、高さ 10mm、二条の間隔 67mm の間に点状の蓮珠文は球形、径約 50mm、高さ約 40mm に足を付けたものを、約 90mm 間隔に埋め込む。鰭は長さ 180mm 元の幅 82mm で、ほぼ等間隔に高さ約 6mm の段を設けて表し、胴には綾杉文を篋描きする。一破片での綾杉文の施文幅は 42mm、無施文帯との間に篋描き沈線を以て直線区分していることから推して、この綾杉文は縦帯の内側に添って帯状に施文されていたものである。また他の一破片は表裏とも篋撫でされず、ほぼ直線の一辺は長さ約 270mm 厚さ約 28mm で、深さ約 200mm の弧を描きながら、上下両方へ厚さを増し、伸びる所で割れている。これは尾の頂部の先端部分で、その先端のカーブを描くものであらうと思われる。なお今回の調査でも 6 個の破片が出土している。

5 塼

第一類 (14) 塼の出土は大別して二種、完形品はない。この第一類は無文で長さ不明（現長 128mm）幅 108mm ～ 101mm 厚さ 38 ～ 29mm と、下部は幅広で厚く上部ほど狭く薄い。色は濃灰色、細砂を含み焼成はやや脆い。

第二類 (15 ～ 18) これは鐙瓦などに用いる蓮花文を使っている四片で、更に三分類できるが、このような蓮花文使用の塼は未だ聞いていない。これらはいずれも薄い灰褐色で、胎土は比較的良質であるが、焼成はやや軟らかい。

(15) 108mm の短辺から平行に立ち上がった長辺（現存の高さ 130mm）の、右側に鐙瓦 (2) の蓮花文と思われるものが 27mm 喰い込んでいる。また左側には一重の圈線が 21mm の深さで喰い込み、この圈線内には蓮花文は存在しないと見える。左の一

重圏線の内側の無施文という、二点において他と区分の必要を認めた。厚さ 26mm である。遺品はこの一片のみ。

(16) 縁に添った長さは 74mm、現存の幅は 92mm の破片である。蓮花文の喰い込み 49mm、この外側に接して幅 6mm の一重圏線を巡らしている。蓮花文は同前と思われるが、弁端が鋭く尖っているので、前者及び次と区分した。厚さは前者と同様 26mm 遺品はこの一片のみ。

(17・18) この二片は、ある一辺を挟む二隅に位置するもので、偶然に隅の部分に蓮花文の一部が掛かっているもの。それぞれの長さ・幅・厚さは 78mm・62mm・22mm と、68mm・63mm・24mm である。

6 瓦製装飾品

この名称の命名は奈良国立博物館の稲垣晋也先生である。出土は試掘調査時と今回と、各一点の計 2 点であるが、共に^{たるき}鍔瓦 (2) の蓮花文を主体としている。使用目的は^{たるき}鍔先瓦ではないかとも思われるが、現在の形を最小限に復元しても、通常の^{たるき}鍔先瓦の形状と違う。例えば釘穴が 30mm の大きさになるなど、問題があるので、この名称を用いた。或は前述の塙の一部かとも考えられる。

(19) 胎土はやや粗く焼成もやや軟質、薄い灰褐色を呈す。まず現形をみると、鍔瓦の外縁部は完全に欠損している。次に中房の周縁部で約 10mm を残して、膨らみを持たせ、中心部に径約 30mm の穴を穿つ。この後一枚の花弁の長さの半分弱のところで、直線をもって切断している。現在の高さ 107mm、幅 66mm、厚さ 21mm を計る。裏面は平らに篋撫でする。

(20) 胎土はやや粗く焼成は脆く、表面は凹凸が激しくざらざらしていて、濃い褐色であり、最長部の長さ 89mm、最も幅の広い所 46mm、厚さ 19mm である。中房に開けた穴の周囲は約 13mm を残す。

南北小山廃寺出土古瓦一覧表 注 (1) 単位はmm、(2) 備考欄右端の数字は「飛鳥 白鳳の古瓦」の図版番号、(3) 11・13 は北小山廃寺出土土瓦である。

番号	鍔瓦 名称	直 径	内 区				外 区		周 縁			厚さ	胎土	焼成	色調	備 考
			中房径	蓮子数	弁長	弁幅	弁数	幅	文様	幅	高さ	文 様				
1	素弁蓮花文鍔瓦	178	46	1+8	46	25	10			14	12	一重圏	23	粗	堅	濃灰
2	素弁蓮花文鍔瓦	188	53	1+8	48	26	10			16	13	同 上	38	粗	軟	灰褐 1 の型崩れ。 90
3	単弁蓮花文鍔瓦	162	38	1+4	41	25	8			13	8	二重圏	30	粗	軟	灰白 131
4	細単弁蓮花文鍔瓦	164	52	1+6	44	23	12			9	6	一重圏	35	粗	やや軟	灰白 173
5	細単弁蓮花文鍔瓦	160	51	1+6	42	22	12			10	5	同 上	?	粗	やや軟	灰白 4 の型崩れ。
6	重弁蓮花文鍔瓦	175	34	放射状	49	29	8			18	15	素	18	粗	軟	白茶
7	重弁蓮花文鍔瓦	183	37	同上	52	30	8			17	15	同 上	16	粗	軟	灰白 6 の型崩れ。
8	単弁蓮花文鍔瓦	?	47	1+6	?	?	10			?	?	?	17	粗	軟	灰白
9	素弁蓮花文鍔瓦	181	47	1+8	48	34	10			13	15	一重圏	24	粗	脆弱	暗灰 間弁は三角形を呈す。
10	素弁蓮花文鍔瓦	178	31	0+4	61	37	9			15	15	一重圏	26	粗	脆弱	灰褐 同 上
11	単弁蓮花文鍔瓦	166	47	1+6	35	23	10			18	10	一重圏	26	良	軟	褐

番号	宇 瓦 名 称	上弦幅	弧深さ	下弦幅	厚 さ	顎形式	顎 幅	胎 土	焼成	色 調	葺 様 式	備 考
12	押印三重弧文字瓦	?	?	?	57	段 顎	76	粗	やや軟	薄 茶	本瓦・行基・両様	425
13	四重弧文字瓦	?	?	?	67	段 顎	67	良	やや堅	褐	本瓦・行基・両様	417

7 北小山廃寺瓦

ここに北小山廃寺の瓦を採り上げる理由は、同じ大字内にあることと、ほぼ同時代に創建されているからで、これに対し、多度神宮寺の創建は、平安初期と言うが出土する瓦当は同後期から、室町期に互っているので、採り上げないこととした。さてこの北小山廃寺出土瓦は、鐙瓦と宇瓦が一種ずつで、他には平瓦・丸瓦とがある。

(11) 重圈文縁 単弁十葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形形式

胎土は良質ではあるが、火災に会ったためか、収集した二片とも、やや褐色を呈している。中房は比較的大きく、花卉・子葉とも力が弱く、この周囲に一圏を巡らす。周縁は最内側に一重圏を置いている。

この瓦と、南小山廃寺瓦(8)とが、同範なのではないかと、常々考えていたが今回改めて拓本を重ね検討の結果、両者の中房を比較すると、前者よりやや小振り(一覧表で径が同じなのは、こちらの瓦の最大のところで計測した為である)で、その蓮子も同じ1+6ながら、蓮子の配置が違い、花卉の線などにも相違が見られることから、同範ではないと確信を持った次第である。

(13) 四重弧文字瓦

瓦当の両端は直截型である。胎土は良質で焼成も堅い部類で褐色を呈する。弧文は瓦当の厚さをほぼ四等分していて、その彫りは(高低差)約2mmで、浅い方(同程度のもので4mm程のものもある)であるが、四重弧文字瓦の最も平均的な形である。勿論、組合わせの鐙瓦は、前記(11)に他ならない。

また当遺跡出土の丸瓦も、本瓦葺と行基葺とが混在している。

[2] 古墳時代の土器

須恵器

蓋(21) 径10.8cm、高さ3.6cm、天井部と体部の比高はほぼ1:1である。天井部の1/2は回転ヘラケズリによる調整、成形はマキアゲ・ミズビキによる。稜は体部上端に沈線を入れることで表現している。体部は外方へ開き、口縁端部は丸い。

杯(22・23) 22、径10.8cm、高さ4.5cm、底部の1/2が回転ヘラケズリされている。底部から体部に向かってゆるやかに内弯するが、体部とは段をもって画し外反して受部にいたる。口縁部はやや内傾して立ちあがり、口縁端にわずかに面をもつ。

23、小型化、扁平化した杯である。径9cm、高さ3.5cm、底部のヘラケズリも1/3程度と簡略化している。口縁部も22に比べさらに内傾し、短い。口縁端は丸くおさめる。ロクロ方向は逆時計回りである。

高杯(24) 脚基部径2.9cm、脚底径9cm、脚高4cmである。基部からラップ状に大きく開き、脚底端部をつまみあげ、凹線をつくる。脚部の上方1/3のところの太めの沈線がはしる。他に太い基部に2箇所長方形透しのある脚部が出土している。

平瓶(25) 底部及び胴部の1/3を粗くヘラケズリしている。全体の形は扁平な球

状で肩も張らず丸味を帯びる。把手はつかない。胴部の最大径は中央やや上にあり13cmである。

短頸壺（26）口径12.1cm、最大径は肩にあり16cmである。丸い口縁端部をもち口縁部から肩にかけてはなだらかで、一条の沈線がめぐり肩の張りを強調している。

[3] 奈良時代の土器須恵器

須恵器

蓋（27～31）口径が大きく扁平なもの（27）、全体に丸い感じがあり、口縁端断面が三角形で、やや内傾するもの（28～30）、宝珠つまみがつぶれ、天井部端に大きな段をつくり、口縁端が外開するもの（31）がある。口径は27が最大で20.4cm、最小の31が12.2cmである。

杯（32～36）高台を有するもの（32・33）と平底のもの（34～36）がある。32の体部はハの字に直線的に開き、高台を垂直に貼りつけており、33はやや内弯する体部をもち、外開する高台をつけている。34～36は高台のつかない身で、35が底部ヘラオコシのままであるのに対し、34はロクロナデにより調整している。36は灯明皿として使用されており口縁部各所にススが付着しているばかりか、器壁がかなり荒れている。

土師器杯（37）径9.4cm、高さ2.8cm、平たい底部から内弯しながら立ちあがり口縁に至る。36と同様灯明皿に使用されており、ススが内面全体に付着している。

[4] 平安時代の土器

灰釉陶器

椀（38～41）39は胎土も緻密で丁寧な作りである。高台は高く、断面はいわゆる三日月形をなす。釉は刷毛塗りによって施されている。38、高台は断面三角形で低い。焼成によるゆがみがあるが、径15cm前後、高さ4.8cm、ナデ消してはいるが底部外面に糸切り痕が残る。40、41は上記の中間的な高台をもっている。

[5] その他の土器

天目茶碗（42）削り出し高台で、内面及び体部下半にまで茶色の釉がかかる。素地は全体に鉄泥をかける。

摺鉢（43）径28cm、12本の櫛状原体による摺目を6～7箇所配している。

内耳鍋（44）径21cm、口縁下部を外側へ押し出し、内側に粘土紐を貼りつけ断面だ円状の穴をつくっている。器壁はうすく、口縁端に水平の面をもつ。外面は全体にススが付着している。本県ではこの器形の出土は極めて少ない。

この他に羽釜形土器や45のような漆椀が出土した。45は漆椀の見込み部分で黒漆地に朱漆で「興」とかかっている

V まとめにかえて

1) 当地出土の鴟尾について、これまでに何等かの、解説をされたものから、その文面、若しくはその主旨を集めてみた。

まず昭和 11 年 4 月、帝室博物館で開催された「奈良時代出土品展覧会」の展観図録『天平地宝』では、図版 10 にある、この鴟尾の解説で、「珠文帯の内区に鋸歯文を作った事に於いて他に例が無い。然しこれは様式からは、珠文内区に葡萄唐草文を入れた知識寺鴟尾（太平寺とも、現大阪府柏原市堅下）と同じ過程にあるもので従ってその制作年代も相近いものと思われる。且つその珠文帯制作の技法は注目し値する。」とある。

また同 43 年 4 月、奈良国立博物館での「飛鳥・白鳳・古瓦展」の展観図録『飛鳥白鳳の古瓦』では、図版 563 の解説で、鴟尾の分類上、唐様式の第二様式とし、鱗は段型で縦帯を設け、胴部は平滑型で施文・無文のものがあるとし、その第四形式に、縦帯は連珠文で内側に装飾文のあるものと分類をした上、「胴部から尾部に移る屈曲部の残欠で、縦帯には半球形の連珠文を貼り付け、その内側には、綾杉文帯を篋書きしている。」と説明されている。この次に前記の大阪府太平寺の図版・解説がある。

同 56 年 7 月、三重の考古遺物編集委員会の『三重の考古遺物』でも、殆ど奈良博の図録と同様の内容である。

2) ここで、押引重弧文字瓦、続いて型押重弧文字瓦について見ておきたい。最初に押引重弧文字瓦について、前記『飛鳥白鳳の古瓦』群馬・上植木廃寺、奈良・法輪寺が挙げられている。また昭和 60 年 1 月名古屋市博物館の部門展「尾張の古代寺院と瓦」には、一宮市・長福寺廃寺、名古屋市・元興寺があった。言うまでもなく、これらは押し引きの手法によるもので、当廃寺のものとは、やや異質であるので、ここでは内容まで立ち入らない。

また型押（又は押印とも）による重弧文字瓦（以後は型押系と略記する）については、『飛鳥白鳳の古瓦』でご指摘の、愛知県宝飯郡小坂井町篠東字郷中・医王寺がある。又、名古屋市博物館の前記部門展などに出展の、名古屋市守山区小幡・小幡廃寺と、今年開催の同市博、部門展「愛知の新出土品展」出展の豊川市国府町字山ノ入・山ノ入遺跡と、以上三箇所からの出土例がある。これら型押系を文様形式の上から分類すると、二形式となる。その第一形式は医王寺にのみある。

この第一形式は、外枠を作るが、その外法は高さ 43mm ～ 50mm・上部幅 29mm・下部幅 39mm の裾広がりの台形で、一個 6mm × 16mm の長方形三個を、上下幅 9mm の横棧二本を挟んで打ち込む。これが基本の一セットとなり、互いの間隔を約 7mm 開けて横に並べ、逆さの扇型にした押型（スタンプ）を製作し、これを型押しして成形したものであろう。尚、瓦当の両端は直截している形式である。

第二形式は、医王寺に二種、小幡廃寺・山ノ入遺跡に各一種あるようである。さてこの形式には、外枠がなく、単に長方形の押印を縦に粗密に、更に横に繁粗に配置するもので、瓦当の両端は直截型と、三角型とがある形式である。ここで当遺跡の宇瓦を、先の医王寺のものと、比較する為に先のIV-2-(12)の記述と重複するが、敢えて細かく見ることとする。当所のものは、医王寺第一形式に似通っている。しかし、医王寺における台形の外枠がなく、文様に歪みがみられる。型押しされたスタンプに二種ある。

先ず第一種は、表面積より狭めて打ち込まれた、二個の長方形の内法は、上部が8mm×30mm、下部7mm×31mm、共に裾広がり、間に13mm幅（計測は上下長方形の内法計測点）の横線を挟む。左右へ斜めに立ち上がった縦線上面までを、一セットとするスタンプを作っている。なお瓦当の両端と上下を基準面とすると、縦線が1mm膨らみ、横線が1mmへこみ、長方形底面は3mmへこむ。そこで、一瓦当面にこのスタンプを押印する時、瓦のカーブに従って型押ししたので、自然に縦線は伸縮することとなり、その幅は8～10mmとなっている。

第二種については、上の記述順に計測数を上げるに止める。長方形の上部8mm×28mm、下部不明、横線13mm、縦線膨らみ2mm、横線へこみ1mm、長方形へこみ3mm、縦線幅8～17mmとなっている。但し、全て計測は各一個体から離れていない。

またこの瓦当面に、何個のスタンプが型押しされたかについては、平瓦の頭部の幅258mmをそのまま利用し、縦線の幅を考慮にいれ、6個と推定してみた。

3) 桑名市内の廃寺からの出土品については、常に公開されていたものが多く今更の感はあるが、今回関係の方々にお世話になり、ご迷惑もお掛けしましたので記してお礼に替えさせていただきます。

(1) 額田廃寺

① 鑑瓦 重圈文縁 単弁八葉蓮花文鑑瓦（奈良国博編『飛鳥白鳳の古瓦』125）で中房に1+6の蓮子、花卉端反転形式の蓮弁で、その外の溝に一圈を巡らし、周縁は四重圈を巡らす。ややバランスは崩れているが、典型的な山田寺様式の鑑瓦である。直径176mm。尚、収集者は故吉川重武氏（同市額田在住、現伊藤春彦氏）蔵。

② 鑑瓦 面違鋸齒文縁 複弁八葉蓮花文鑑瓦（前掲書211）花卉端切込反転形式で典型的な川原寺様式の鑑瓦、中房上の蓮子の配列が1+4+9となるところは前掲書に、「川原寺出土204と同範である」旨解説されている。直径181mm。これはまた八賀三重大学教授の御教示によれば、北勢地方での出土はこれが唯一ということである。当廃寺からは、今まで宇瓦は一枚も、否、一破片すらも出土していない。平瓦を重ね宇瓦の代わりに利用したのかもしれない。なお当遺跡出土の丸瓦は、本瓦葺と行基葺が混在している。

③ 金銅仏 市文化財指定 これは小型でやや摩滅しているが、頭上に何かを頂き、左手は上方を指し右手は下方を指し、左足を上げて右方より高くなっている岩座を

踏まえる。一見したところ、手足の動きを逆にした蔵王権現の姿である。法量 $59 \times 27 \times 18\text{mm}$ 。所蔵者は同市額田の柴田寅王氏である。

④埴仏 桑名市文化財指定のもので、蓮花座に結跏趺座し、法界定印の如き印を結ぶ如来像が、宝珠光背を負う形である。法量 $61 \times 28 \times 9\text{mm}$ 。所蔵者は柴田寅王氏である。

⑤埴仏 頭上には菩提樹の葉と思ぼしいものが垂れ下がっており、下部に何か組上げ構造を持つ、台座（蓮花座か）の上に結跏趺座し、偏袒右肩の衲衣を着し、触地印の降魔成道像で、宝珠光背を負い、左右に菩薩立像が添えられると言う、やや複雑な構図を持つ。法量 $91 \times 54 \times 24\text{mm}$ 。元収蔵者の故吉川重武氏より故伊東富太郎に贈られた。（現伊東春夫蔵）

(2) 西方廃寺

①鐙瓦 素文縁 単弁八葉蓮花文鐙瓦 花卉端反転形式 特徴としては、中房上に $1 + 8$ の蓮子があり、その周縁に幅 4mm の中凹みの圈が巡っていること、また子葉の輪郭を除いては、やや力が弱い感じである。推定直径 164mm 。

②鐙瓦 素文縁 珠文帯 複弁八葉蓮花文鐙瓦 花卉端切込反転形式 中房は平面で $1 + 6$ の蓮子に周縁が巡る。外区は二本の圈線の間に珠文を入れる。どの描線も細く弱い。推定直径 172mm 。

③鐙瓦 重圈文縁 飛雲文帯 素弁十三葉蓮花文鐙瓦 花卉端円形形式 中房は平面で $1 + 4$ の蓮子に周縁が巡る。外区に飛雲文八個、二重圈文縁である。全体に線が弱い。直径 176mm 。

④鐙瓦 素文縁 素弁十一葉蓮花文鐙瓦 花卉端反転形式 中房は風車の羽を八枚重ねたように見える。推定直径 182mm 。

⑤鐙瓦 素文縁 素弁十一葉蓮花文鐙瓦 これは『三重県古瓦図録』第二図によると、桑名市立大成小学校蔵のもので、中房の中心珠文から細型の八葉の蓮弁（又は菊花弁か）が放出している。これを著者の鈴木氏は「蓮弁ニ複線ヲ用ヒ、子房部ニ放射線ヲ有シ」と記しておられる。なお同書によると半径 9.5cm とある。（最近、学校に問い合わせたところ、心当たりがないというお返事であった）

⑥宇瓦 珠文帯 唐草文字瓦 瓦当の両端は直截型である。上下・両側の外区に珠文を飾り、内区には左行する唐草文を置く。採集されているのが一個体で、然も左半分で、中央の部分を欠失しているため、唐草文が均正唐草文か、又は扁行唐草文かは不明である。尚、鐙瓦との組合わせは②ではなかろうか。

⑦宇瓦 飛雲文字瓦 瓦当両端は直截型である。この瓦も左半分の破片一個体だけの採集で、中央部分が欠失し、均正か扁行か確定し難いが、この飛雲連続文は、例えば、前記の鐙瓦③、或は至文堂発行『日本の美術・古瓦』の「第 118 図飛雲文字瓦」のような、飛雲の尾部が続行する文様の頭上に消えるのではなく、その尾部が後続紋様の下に消えていく、右行する連続紋様であるから、扁行文と考えられる。

又、鐙瓦との組合わせは③であろう。

⑧宇瓦 均整唐草紋宇瓦 瓦当両端は直截型である。瓦当面の上下左右に二条の圈線が囲い巡っている。この瓦は模様が盛り上げてあるが、彫りが浅いため、不明瞭である。然し普通の波形の連続唐草文と違い、圈線内をほぼ1:2:1となるよう四条の縦線で割りつけ、中に蓮花の花を斜め上からみるような文様がある。蓮花文であるといい切る自信はないので、唐草文の名称を使用しておく。この種の分割法を採ったもの、蓮花文を使ったのは稀であろう。

以上、各方面からの資料を羅列させて頂いたに過ぎませんが、筆者にとってはこの上ない学習をさせて頂きましたことに、御礼申し上げます。

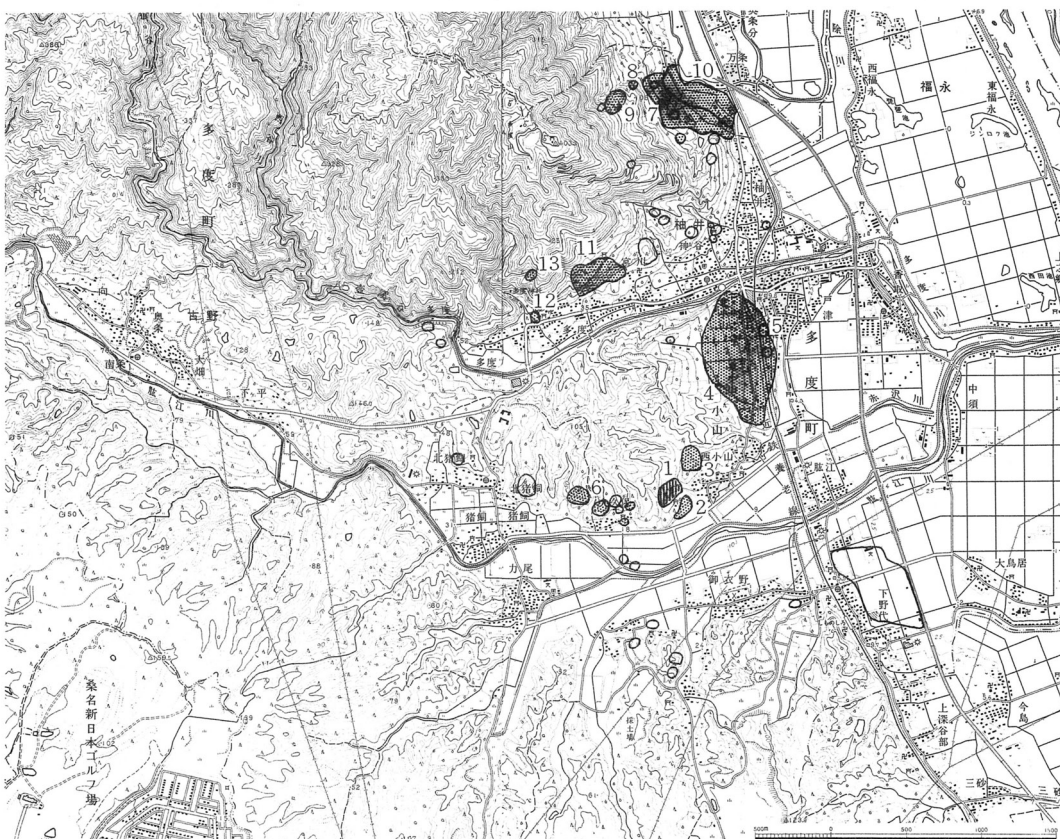
ここに、この項の記述にあたり、桑名市博物館・名古屋市博物館・愛知県小坂井町教委・同中央公民館・水谷次郎氏・阿部正好氏を始め、多数の方々から御教示御指導、また御便宜を与えられましたことに、深く感謝を捧げます。

图

版



南小山廃寺航空写真（中央部分・南から）



第1図 遺跡位置図（1：50000）国土地理院 1/2.5万阿下喜・弥富

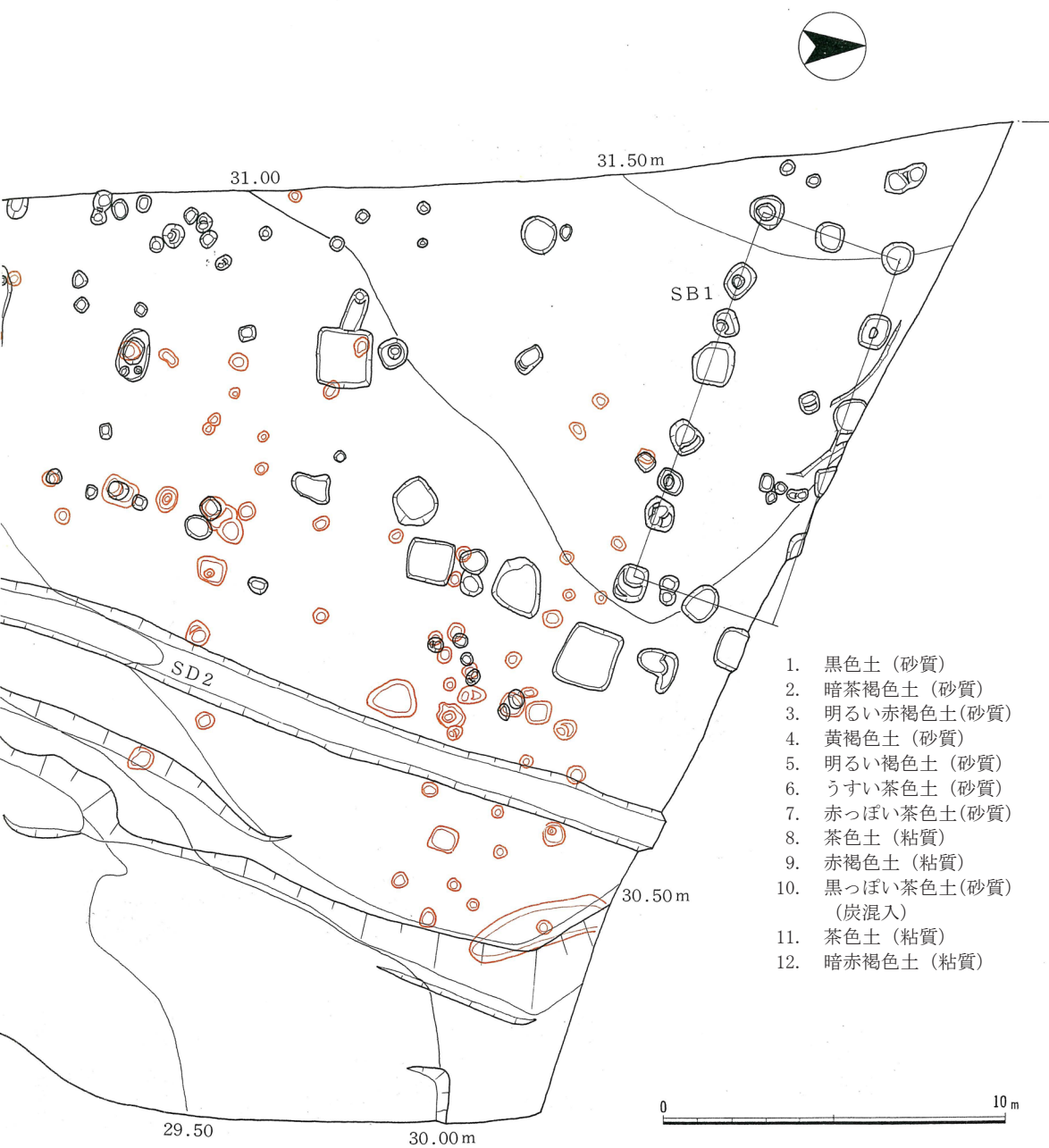
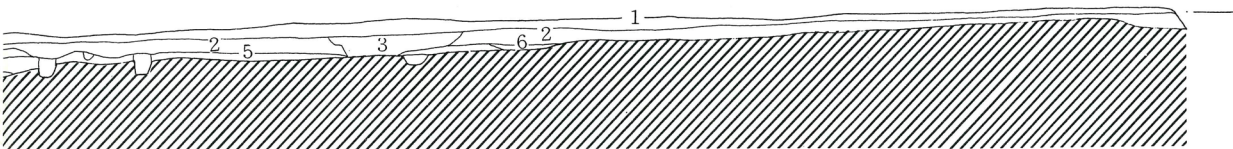


第2図 遺蹟地形図 (1:1000)

— 32.00 m

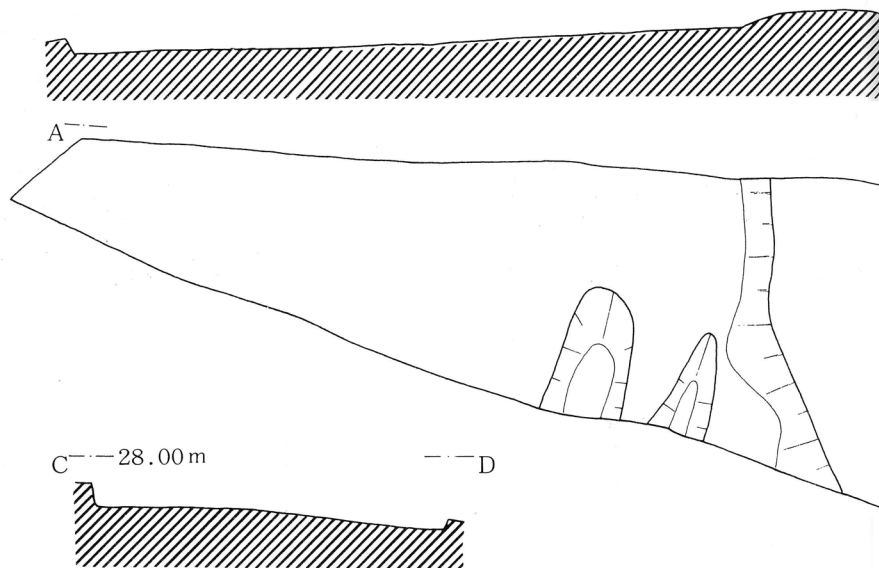


第3図 B地区遺跡平面図 (1:200) 黒:上層 茶:下層

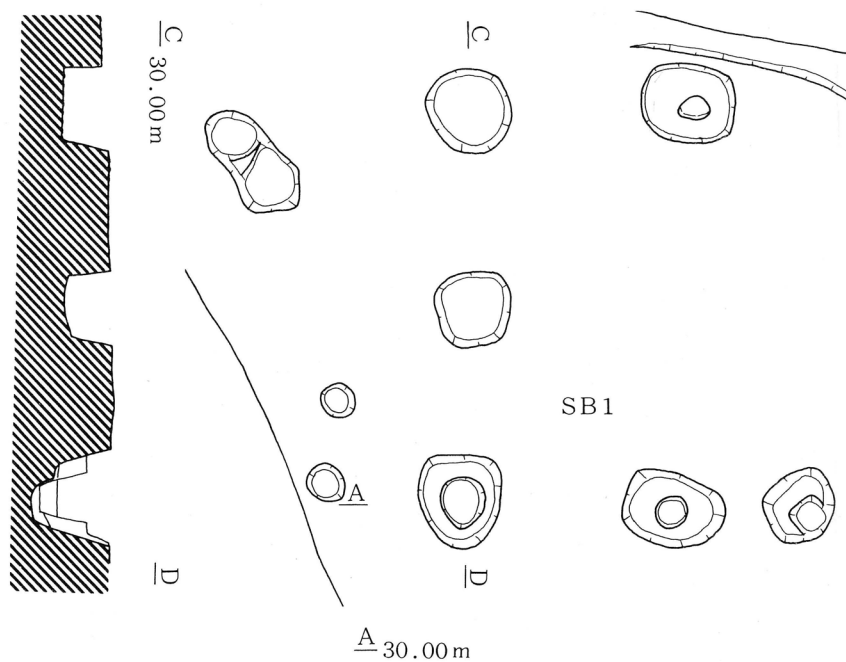


1. 黒色土 (砂質)
2. 暗茶褐色土 (砂質)
3. 明るい赤褐色土 (砂質)
4. 黄褐色土 (砂質)
5. 明るい褐色土 (砂質)
6. うすい茶色土 (砂質)
7. 赤っぽい茶色土 (砂質)
8. 茶色土 (粘質)
9. 赤褐色土 (粘質)
10. 黒っぽい茶色土 (砂質)
(炭混入)
11. 茶色土 (粘質)
12. 暗赤褐色土 (粘質)

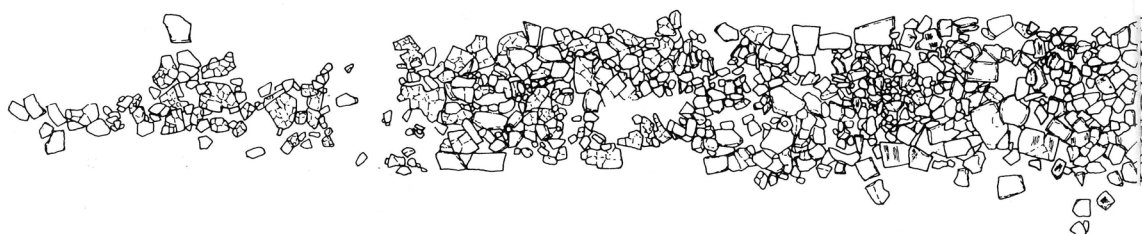
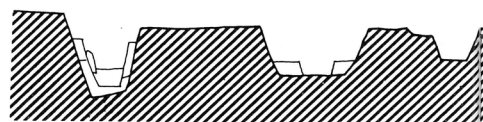
A---28.00 m



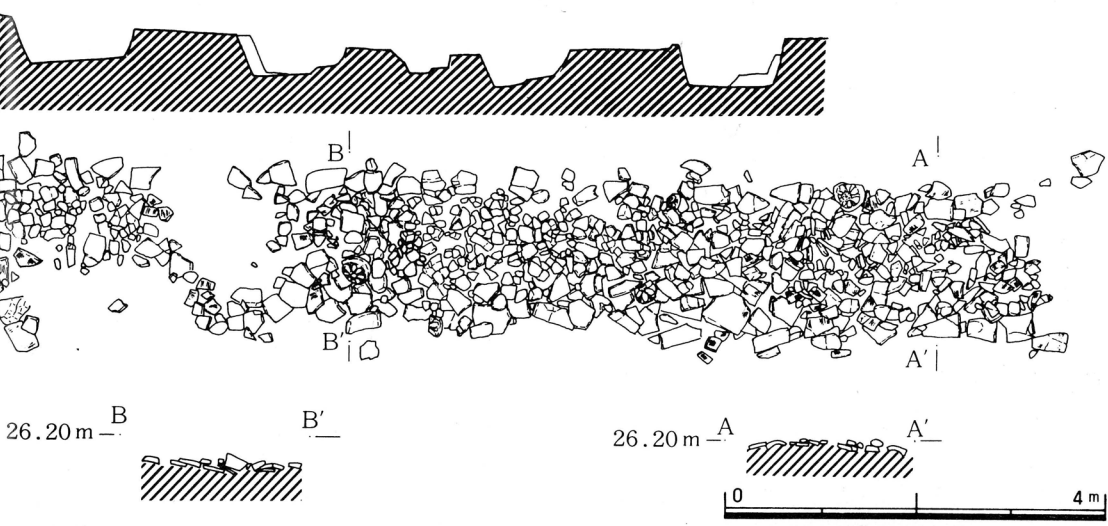
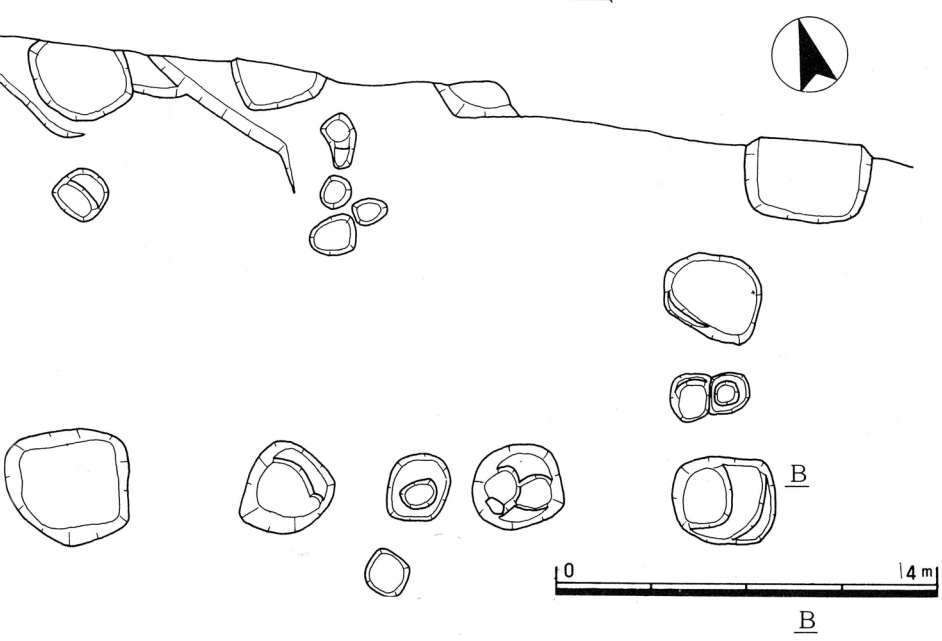
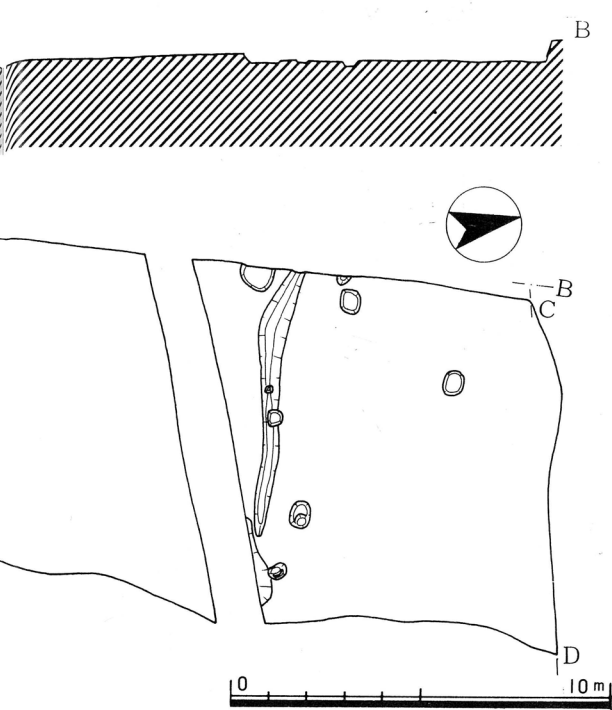
第4图 A地区遺構平面図 (1:200)

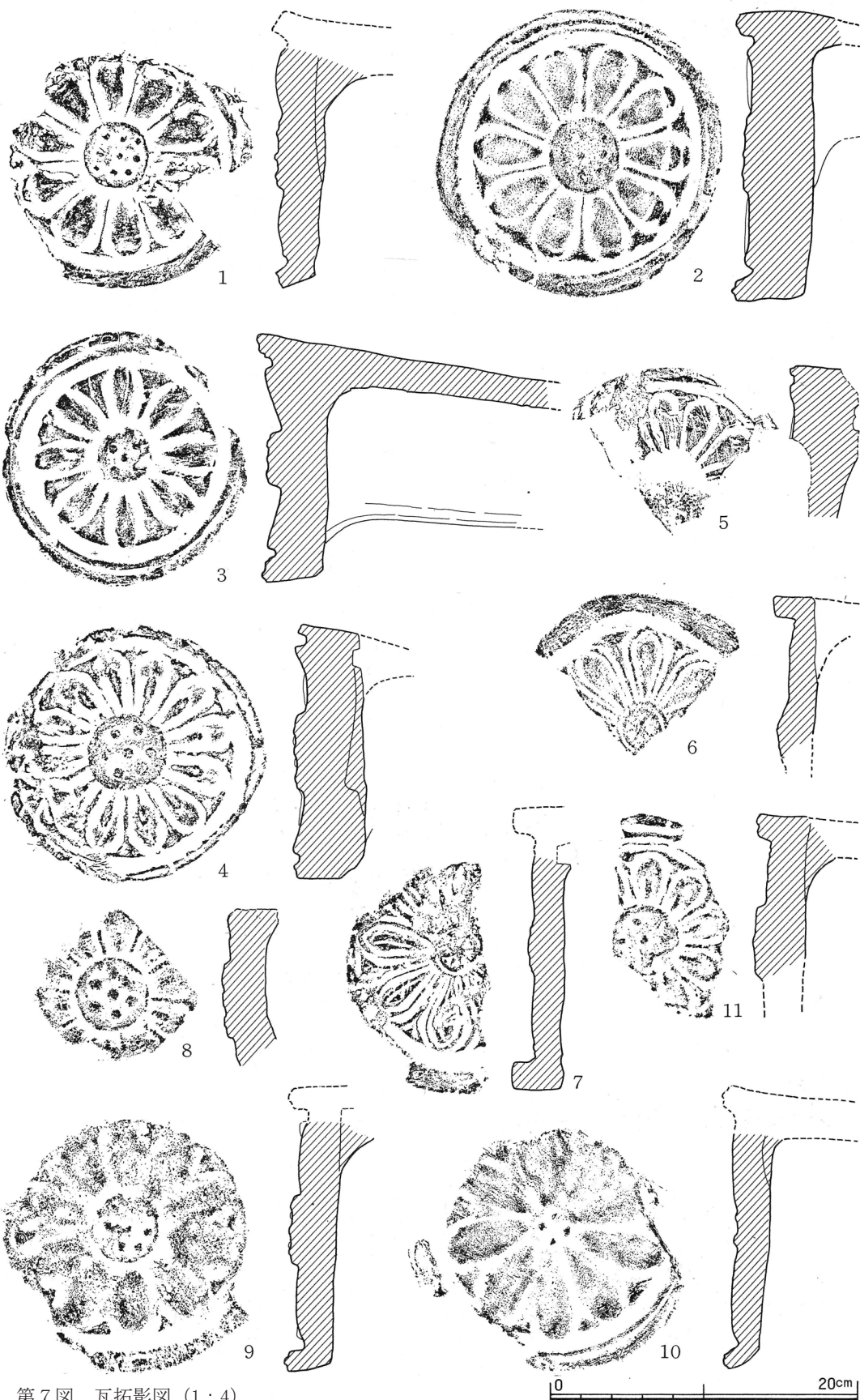


第5图 掘立柱建物平面図 (1:80)

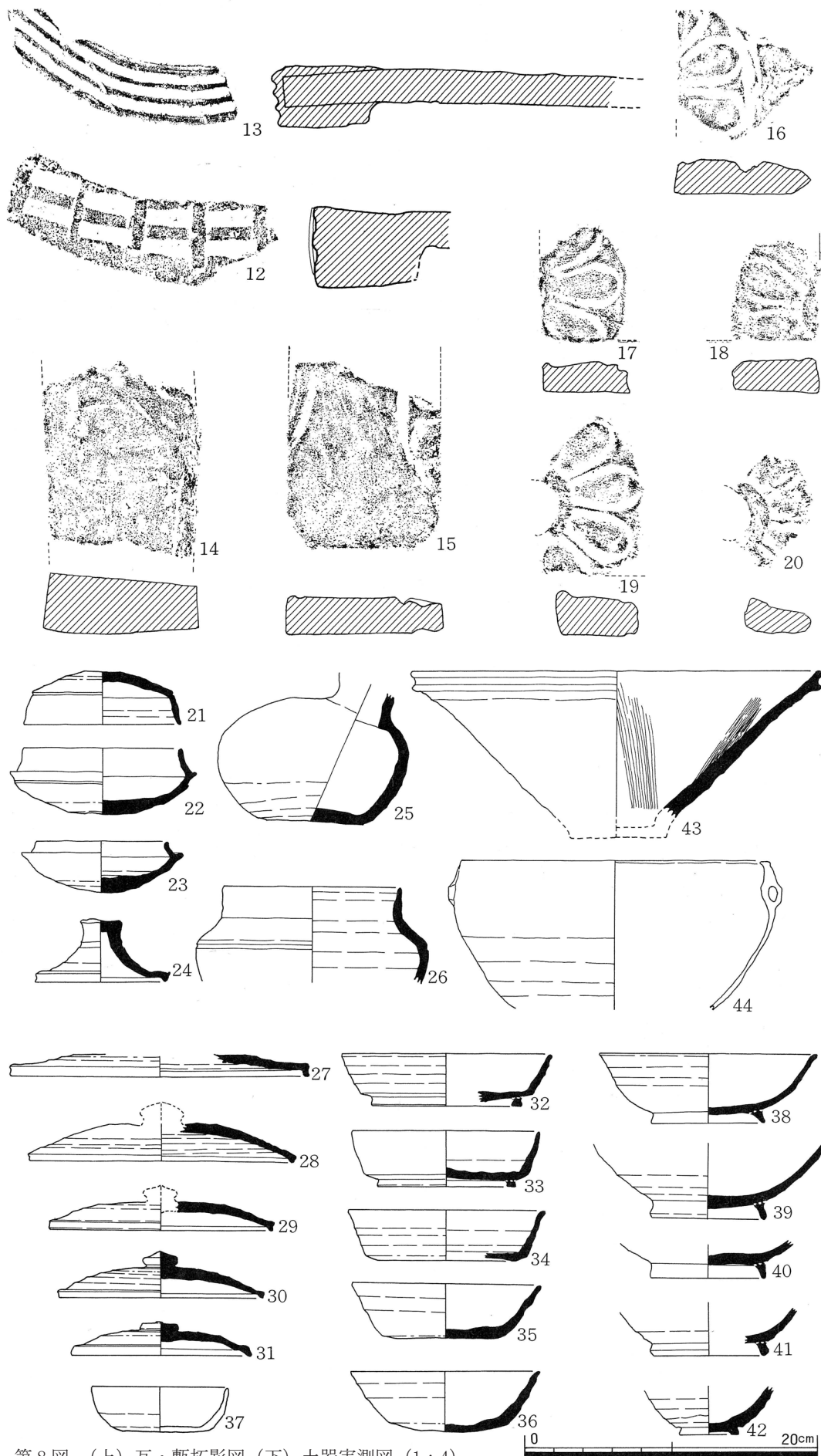


第6图 SX3平面図 (1:80)





第7图 瓦拓影图 (1:4)



第8図 (上) 瓦・甎拓影図 (下) 土器実測図 (1:4)



A区全景（北から）



B区南半部（北から）



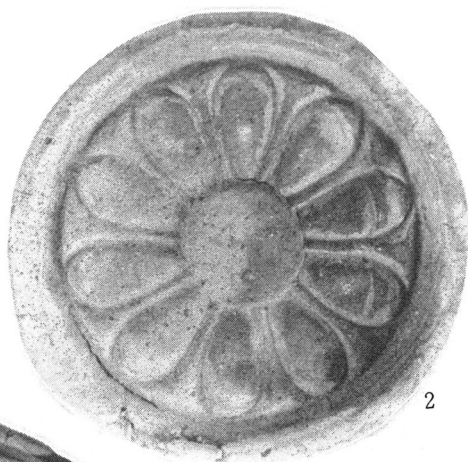
S B 1 (西から)



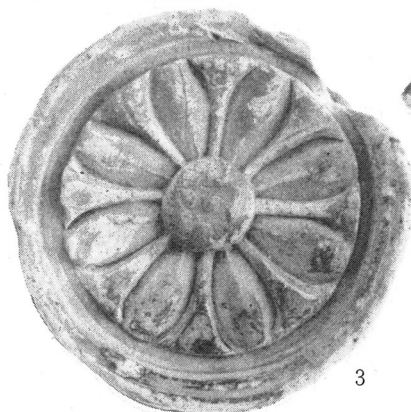
S X (北から)



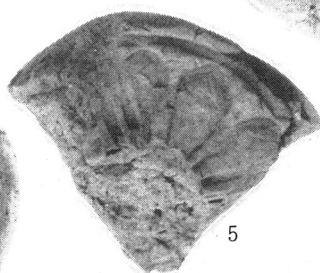
1



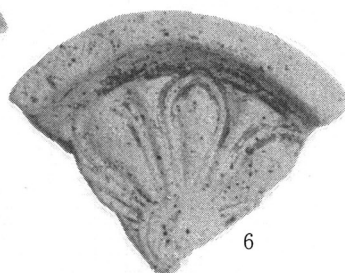
2



3



5



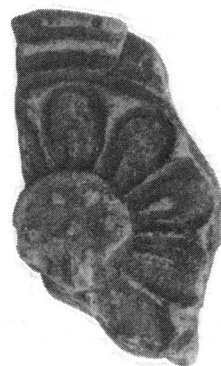
6



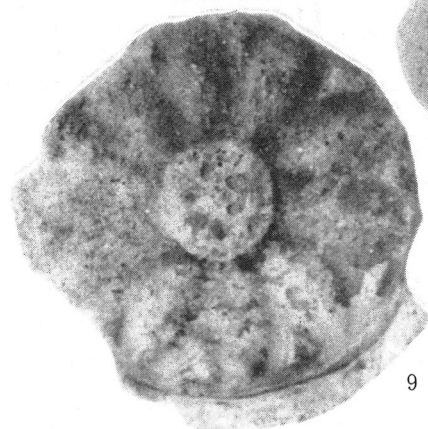
4



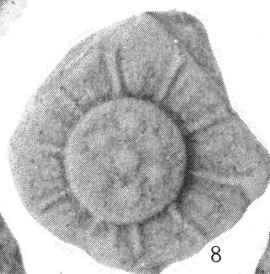
7



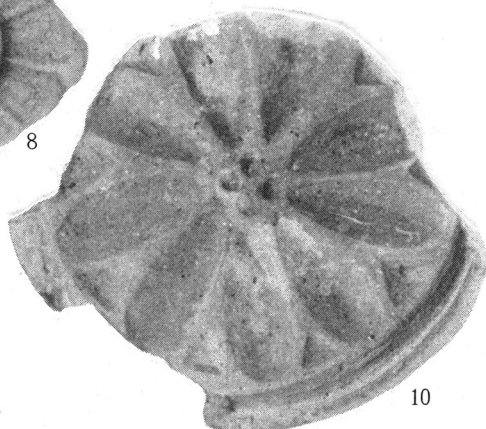
11



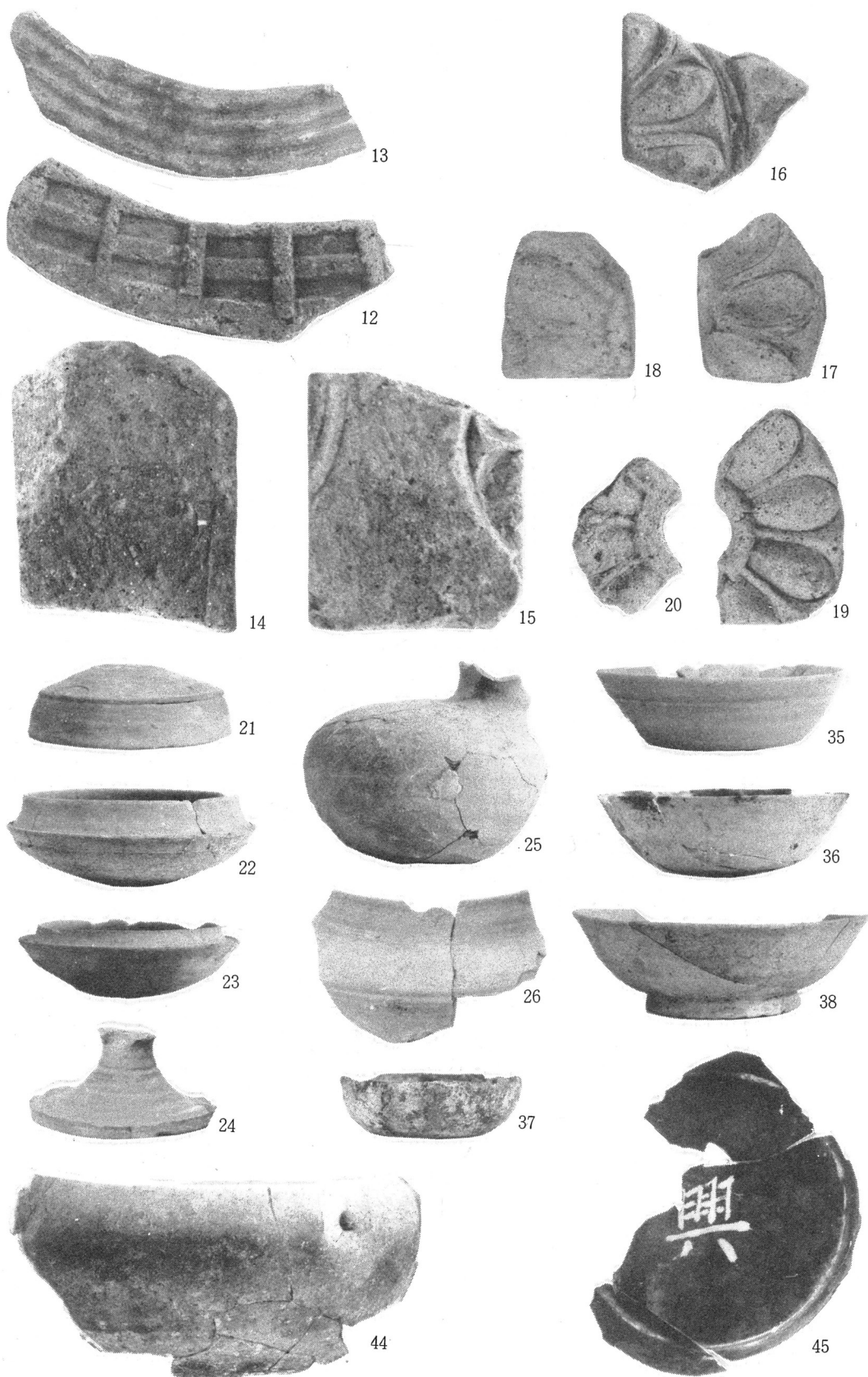
9



8



10



遺物写真 (1 : 3 ただし 45 を除く)

